

『伊勢集』成立年時試考

——巻頭の歌物語と『平中物語』との関係を中心に——

妹尾好信

はじめに

現存『伊勢集』の諸本が大きく三系統に分けられることは、夙に関根慶子・島田良二両氏によって指摘され、以来定説となつてゐる。三種の伝本間には、歌の出入、歌序の相違を始め、相互にかなりの異同が見られるが、いずれも同一の祖本から生じた異本であると考へられている。

関根氏は三系統の本文を詳細に比較検討され、歌群の出入りの整理や他文献所収歌との関係の考察を通じて各系統本文の組織を明らかにし、共通祖本の形態を追求された。その結果、氏は、三系統そ

れぞれに伝流過程において何段階にもわたる歌群の増補や脱落を経てきているものの、冒頭から約四〇〇首弱が現存『伊勢集』共通祖本の原初形態であろうとされた。それによると、各系統本の構造と相互関係は左上的ようになる。

a b x が三本の共通部分で、うち a が本来の『伊勢集』の祖本にあたる部分、x は伊勢の家集とは別の私撰集からの混入と見られる部分、b は共通増補部分とされる。

関根氏の緻密な考証は極めて説得力に富んでおり、従うべき見解であると思う。本稿においても氏の御説に従つて、a にあたる部分を『伊勢集』の原初形態と見て、考察の対象とすることにする。

さて、その『伊勢集』の冒頭三〇首ほどが、物語的部分と言われ、箇所である。枇杷左大臣藤原仲平との初恋とその破綻にはじまり、宇多天皇の寵愛、皇子の出生とその夭折、そして中宮温子の崩御にいたる波乱に富んだ伊勢の宮仕え生活が、長大な詞書によって物語風に綴られている。この部分についても、その物語的性格、後続する歌集的部分との関連、成立事情およびその時期、編者などの問題に関して、関根氏をはじめ多くの先学によって活発に論がなされ、着実に研究が進んできた。しかしながら、具体的成立年時、編者の特定、他の物語作品との影響関係などについては、いまだ十分

歌仙家集本	1 } 377	a ₃ 脱	1 } 381	a	西本願寺本	1 } 378	a (a ₁ a ₂ 脱)
	378 } 395	b	382 } 446	x		379 } 443	x
歌仙家集本	396 } 423	増補部	447 } 469	b	西本願寺本	444 } 462	増補部
	429 } 485	x	470 } 518	群書類従本		463 } 467	a ₁
	486 } 493	a ₃		増補部		468 } 482	b
歌仙家集本	494 } 513	再増補部				483	a ₂

納得のゆく検討がなされているとは言えないようである。小論は、諸先学の学恩に負いつつ、これら未解決の問題に関して、私なりの推論を試みてみようとするものである。

一、巻頭歌物語と『平中物語』の関係

『伊勢集』巻頭の三〇首ほどの部分が後統部分に比して顕著に歌物語的性格を有しているとされる理由について、関根氏の言葉を借りれば、「物語・歌物語の冒頭形式に殆ど合致して、伊勢を三人称化して登場せしめ、続く三十余首に関する詞書も、一貫して伊勢を第三者として扱い、その三十余首が、一二の例外を除いては前後の脈絡をつけて語られ^(注3)ているという点などである。そして、歌物語の形式としては、ひとりの人物を主人公としてその一代記風に叙述している点や、概ね登場人物の実名を記さず、つとめて醜化しようとしている点などから、『大和物語』のごとき雑多な歌語りの集成的形態ではなく、『伊勢物語』や『平中物語』の系譜上にあるものということが出来る。この巻頭歌物語は、いわば、歌人伊勢をモデルにした一女性の数奇な宮仕え生活史ともいべき性格を有しているのである。

この作品が一〇世紀中頃の歌物語や物語的歌集があいついで製作された頃の産物であることはほぼ間違いないが、とりわけ『平中物語』とは、共通話を有している点で、その影響関係が注目される。すなわち、『伊勢集』一八番歌から二〇番歌までの一連の贈答が、『平中物語』第二段の一部と共通点を有するのである。まず、両書を引用する。

○『伊勢集』

又、おなじ女を、いふともなくいはずともなく、としをへてよばふおとこありけり。返事もせざりければ、「こころとし月に、^(c)などか見つとだにの給はぬ」といひければ、「みつ」とぞいひたりける。それより、此女をば「みつ」とぞつけたりける。おとこ、

18 たちかへりふみゆかざらば浜千鳥 跡みつとだに君いはまじや女、かへし、

19 としへぬること思はずは浜千どり 夫みとめてだに見すべき物か

夏のいとあつき日ざかりに、おなじおとこのよみたりける。

20 夏の日のもゆる我身のわびしさに 水こひ鳥のねをのみぞなく返もせず。

○『平中物語』第二段

又、この男の懲りずまに、いひみいはずみある人ぞありける。それぞ、かれを「憎し」とは思ひ果てぬものから、返りごとともせざりければ、「この奉る文を見たまふものならば、賜はずとも、ただ『見つ』とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」とぞいひやりける。男、やる。

夏の日に燃ゆるわが身の侘びしさに 水恋ひ鳥の音をのみぞなく

又、返りごと。

いたづらに溜まる涙の水しあらば これして消てと見すべきものを

かういひかはしつほどは経ぬれど、逢ふことはいと難うぞ
あれば、(以下略)

『伊勢集』では、「みつ」問答の後に「たちかへり」「としへぬる」の贈答が置かれているが、『平中物語』にはない。そして、『伊勢集』でその後季節が変わってから再び男が詠み送ったとする「夏の日」の歌を『平中物語』では「みつ」問答の直後にたちかへり男が詠んだとする。さらに、その歌に対し、『伊勢集』では「返もせず」と片付けて、以後贈答は続けられないが、『平中物語』では「又、返りごと」として女の返歌が書かれ、なお二人の関係は逢うことのないまま絶えもせずにズルズルと続き、省略した後半部分には三組の贈答を含む八首もの歌が記されている。恋愛の進展の仕方に向者かなりの食い違いがあるが、女の側から語られた『伊勢集』と男の側から語られた『平中物語』という記述者の立場の相違から、「比較して、一つのラプアフェアーの表裏二面を見る(注6)ことが出来る」と萩谷朴氏が言われるように、極めて興味深いものがある。ただ、贈答歌の配列などが相違するため、両者の関係はというと、同一の事実に基づきながら、それぞれ別個の和歌資料(伊勢・平中相方の家に伝わり、それぞれの家集の素材となった詠歌メモの類)に拠って記述したものであって、直接的な書承関係はないとされるのが普通のようなのである。(注6)

しかしながら、はじめの「みつ」問答の部分の記述を両者細かく比較してみると、表現の細部にわたって対応関係が見られることに気がつく。傍線部分をそれぞれ較べ合わせてみよう。(a)『伊勢集』の「いふともなくいはずともなく」は『平中物語』の「いひみいはずみ」に当たるし、「としをへてよばふ」は「懲りずまに」に対

応すると考えられる。(b)『伊勢集』の「返事もせざりければ」という記述は、『平中物語』の「返りごともせざりければ」に全く一致する。(c)『伊勢集』の「などか見つとだにの給はぬ」という部分は、『平中物語』の「ただみつ」とばかりのたまへ」に対応するし、(d)『伊勢集』の「みつ」とぞいひたりける」は『平中物語』の「みつ」とぞいひやりける」にはば合致する。

「みつ」問答のいきさつについて両者が概ね一致しているのみならず、これだけ細部にわたって表現に対応関係が認められるとなると、両者の直接的影響関係をあながち否定し去れないのではなからうか。男側の立場、女側の立場という基本的な叙述姿勢の相違はありながらも、ここまで表現が類似したのは、一方が他方の叙述を受けて、少なくともそれを意識して、自らの立場で記述し直したためと考えた方がよいのではないかと思われる。

そうなるかどうかを参照したのかということになるが、私はおそらく、『伊勢集』の方が『平中物語』の記事を意識しつつ女の側からの叙述に直したものであろうと思う。もし『平中物語』が『伊勢集』を参照したのであれば、二人の贈答歌を積極的に載せる姿勢を見せる『平中物語』の作者が、「みつ」問答に続く「たちかへり」「としへぬる」の贈答を省くとは考え難いからである。

『平中物語』の記す「いたずらに」の歌は「夏の日」の歌の返歌としてふさわしいから、本来この二首は贈答であった筈である。

『伊勢集』は、「返もせず」としてこの返歌を記さないが、これは、関根氏が言われるように、「伊勢集では、物語構想上この歌を故意に割愛した」のであろう。氏は、「伊勢集のこの歌物語は(中略)仲平との初恋の破綻以後、伊勢は言い寄る男達にも顧みせず、

宮仕えに専念して、首尾よく宇多帝の寵をかち得たことを語ろうとする。故にここで平中からの呼掛けに応じない方が主旨に合おう。この物語はテンポが早いのである。(中略)『夏のひの』のあと、『かへりごとなし』(筆者注、西本願寺本文)で打切ったことは、この場合たしかに効果的であった。効果的とは、だからだしなといったのみではなく、いうまでもなく、ひたすら宮仕えへと傾く姿勢を暗示するが故にである」と述べられ、『伊勢集』編者の執筆意図や方法について考えを及ぼされるのであるが、首肯すべき意見だと言えよう。

『平中物語』第二段は、逆に、男に逢うつもりもないのに、妙に氣を持たせてズルズルと中途半端な關係を続ける女に翻弄される男の姿を描くところに作者の意図があったと思われる。両者は「みつ」問答という極めて印象的な事件を扱いながら、恋愛の経緯を描く姿勢も方法も全く対照的なのである。

『伊勢集』編者は『平中物語』第二段の記事を意識しながら、反対に、男に対して毅然たる態度をとる女の姿を描いてみせた。男をもてあそぶタイプの女に描いた『平中物語』の記述にあたかも反論するかのごとくである。「みつ」問答の直後に『平中物語』に載せない贈答を載せたのも、自分のところには『平中物語』作者の知らなかったこんな和歌資料があるのだということを暗示しているかにも思える。『伊勢集』は、「いたづらに」の歌をはじめ『平中物語』の後統部分に記す九首の歌のうち五首までを後の歌集的部分に載せている(女の歌はすべて載せる)。関根氏の言われるように、『伊勢集』の巻頭歌物語部分と後統家集部分とは一体で同一編者によるものであるならば、これも編者が『平中物語』に記す歌を物

語的部分に載せないのは決して知らないためではないということを手張しているような感がないではない。

そうすると、『伊勢集』編者は『平中物語』に対して、かなり露骨な対抗意識をもって巻頭歌物語のこの一節を綴ったということになってくる。まったく恣な臆測めくが、実は、私は、そもそも『伊勢集』巻頭歌物語の執筆動機には、『平中物語』の出現が大きな関わりを持っているのではないかと考えるのである。

二、中務撰の『伊勢集』と『後撰集』

さて、現存諸本の共通祖本たる『伊勢集』が成立したのは、関根氏によると、「後撰集と同時代かその直ぐ前後する時代ごろの成立」であって、かつ、新家堂子氏によると、『古今六帖』成立以前ということになる。『古今六帖』の成立時期については明確でないが、貞元元年(九七六)―永観元年(九八三)の間の頃という説に従うと、『伊勢集』の成立は、天暦から天元の間頃の成立と考えてよいことになる。

この時期における伊勢家集編纂の事実を示す資料として、『拾遺集』巻一・雑秋(一一四一―一一四二)に注目すべき記事があって、夙に著名である。

天曆御時伊勢が家の集めしたりければ、まゐらすとて

中 務

しぐれつつふりにしやどの事の葉はかきあつむれどとまらざり
けり

御返し

天曆御製

昔より名たかきやどの事のははこの本にこそ落ちつもてへ

同様の伝えは、『拾遺抄』巻九・雜上(四二二—四二四)・『村上御集』(一一二—一二三)・『中務集』(一七二—一七三)にも見える。これによって、村上天皇の御代に、伊勢の子である中務に伊勢の家集を求められ、中務がそれに答えて奉ったことがあったことが知られる。そこで、この中務撰の『伊勢集』と現存本のもとなつた『伊勢集』が同一のものかどうかということが問題になるのであるが、これについては否定的な見解が優勢であるようだ。関根氏は、『伊勢集』と『後撰集』との共通歌を詳細に比較検討され、両集の間に取材関係はないとされた。そして、「後撰集編纂の資料として求められたらしい、拾遺集の詞書の暗示する伊勢集は、現存伊勢集(増補部・混入部を除いた部分。以下同)とは別であると想像され、現存伊勢集は後撰集の資料となっていないと考えられる。又、現存伊勢集も、後撰集を資料としていないという結論に達した」と述べておられる。『後撰集』との取材関係の有無に関しては氏の考証に従わねばならないと思う。ただ、そのことがすなわち中務撰の『伊勢集』が現存本の共通祖本たる『伊勢集』とは別であるということになるであろうか。

氏は、先の『拾遺集』等の記事を紹介して、「天曆の御代の後撰集編纂の際、伊勢の子である中務に、伊勢の集を求められたことが想像せられ」云々と述べておられるが、村上天皇が家集を求めたかと言つて、それが『後撰集』編纂の資料とするためだったとは、必ずしも限らないのではなからうか。たとえば『後撰集』成立後いくばくかの年月が経過した在位の末つ方に、撰集とは無関係に改めて家集を求めたというケースもあり得るのではないか。確かに「天曆御時」に家集を召されたとあれば、まず『後撰集』撰集の際と

考えるのが自然ではあるが、そうとはばかりは限るまい。自ら和歌を愛好され、他撰ではあるが家集まで残された村上天皇であつてみれば、『後撰集』成立後も改めて有名歌人たる伊勢の家集を召すことがあつたとしても何ら不思議はないであらう。そして、それが『後撰集』とは別個に求められたものであれば、奉る側も『後撰集』に直接取材することを避け、むしろ異伝資料を中心に『後撰集』の記事とは異なる独自のものをとめて採用するというのが自然なのではないか。したがつて、中務撰の『伊勢集』が現存諸本の共通祖本たる『伊勢集』と同一のものであつたとしても一向に不都合はないのである。

もっとも、中務撰の『伊勢集』が現存『伊勢集』のもとなつたものであることを証明する積極的な根拠は見出せない。しかし、現存『伊勢集』の共通祖本が成立したと考えられるのと同じ時期に中務によつて伊勢の家集が編まれたという事実が認められる以上、それが明らかに別物であるという証拠がない限りは同一であると考えてよいのではないか。関根氏の言われるごとく、「有名歌人の死後、その歌集編纂を企てるものは、一人にとどまらなかつた」とは妥当^(注15)であるかも知れないが、伊勢の場合、明らかに彼女の和歌的遺産を継承したと思われ、自らも有名歌人である子の中務が存在し、しかも一〇世紀末頃まで長命を保った。伊勢の家集を編纂するのにかくも最適な人物がいては、余人が家集の編纂を企てる余地は、少なくとも中務の在世中ではなかつたのではないかと思う。

以上のような理由で、私は、現存諸本の共通祖本たる『伊勢集』は子の中務の撰になるものと認めてよからうと考える。関根氏が否定されて以来、積極的に中務編者説を主張される向きは少ないよう

だが、たとえば片桐洋一氏も、『伊勢集』の巻頭歌物語の部分に關してであるが、「この物語的部分は娘の中務の手によってまとめられた可能性が大であると思う」と述べておられるのである。

三、『安法法師集』の記事について

ところで、現存『伊勢集』の祖本を中務の撰であるとするためには、かつて後藤利雄氏が紹介された『安法法師集』の記事について触れておかねばならない。氏が問題とされたのは、次のような記事である。

伊勢といふ人、歌どもの題かきあつめてやれるに

ひさきおふるかはらのやとの遠近に　みゆるものゝきみにいはせん(五二)

後藤氏は、この記事を根拠にして、現存『伊勢集』の編者は安法法師であるとされた。^(注21)そして関根氏との間に論争が展開されたのであるが、後藤氏の言われたところはこうである。

安法は自分の住む「かはらのやと」すなわち河原院に残っている和歌資料の中から伊勢の詠草に題(氏は物語的な長い詞書の意とらわれている)を自分なりに書き付けて、それを集めた。

そして、歌の下句「みゆるものゝきみにいはせん」という表現は、巻頭歌物語で平中が伊勢に「見つ」とだけでも「いはせん」としたことをひっかけて言ったものと思われる。したがって、安法が書き集めた伊勢の家集はすなわち現存の『伊勢集』巻頭歌物語であるとされたのである。さらに、安法が伊勢の歌の題を書き集めたのは特定の人から頼まれたわけではなく、「かきあつめてやれる」というのも、「親交のあった人々に、この様なものが出来たよ」とい

送る際に歌を添えてやったというぐらいの意味であろう」と言われた。

^(注22)興味深い御説ではあるが、これについては逐一関根氏の反論がある。氏は、『安法法師集』の記事に關して、その詞書を「伊勢という歌人の詠んでいる歌の題を、あれこれ書き集めて(或人に)遣わした際に添えた歌」の意に解釈され、その題とは河原院の遠近にも見られる風物であり、歌意は「河原の宿の遠近に見」える物々について、对者に歌を詠ませよう」というところであるとされた。また、後藤氏の言われる『伊勢集』の平中との「みつ」問答との関連についても、「みつ」でなく「みゆる」では意味をなさないとし、「いはせん」の語は『伊勢集』に全く存在しないことを理由にきっぱりと否定された。関根氏は、安法が伊勢の歌の題を書き集めたのは、何びとかが著名歌人の詠んだ歌の題を用いて習作または再詠する目的で要請したのに応じたものと解されるのであって、伊勢の家集を編んだというわけではなく、ましてや現存『伊勢集』に見られる巻頭歌物語を作ったとはとうてい考えられないと説かれるのである。

この反論には説得力があり、基本的には関根氏の言われる解釈に従うべきであろうと思われる。ただ、私としては、安法法師に伊勢の歌の題を収集させた人物とその目的について、関根氏とは若干異なった考えを持っている。安法に伊勢の詠んだ歌の題の収集を依頼したのは、その題によって習作・再詠を試みるというような目的のためではなくて、やはり伊勢に關する和歌資料を広く収集する作業の一環として、河原院に残された伊勢の詠歌資料を手に入れるためであったと考えた方がよいのではないか。そして、その依頼主は、他ならぬ、村上天皇に伊勢家集の献上を求められた中務だったのだ

はあるまいか。中務は、天皇の命に応じて伊勢の詠作を収集整理していたのであるが、手元に残っている資料だけではなく、伊勢ゆかりの人々にも資料の提供を求めたのではないかと思われる。河原院は伊勢が寵を得た宇多院が晩年住まれた邸であるから、そこに伊勢の詠草が多く伝えられていても不思議はない。『安法法師集』の詞書に「いせといふ人（の）歌ともの題」とあるのにこだわって、和歌を含まず「題」だけを書き集めたと考えられる関根氏の意見はいかがかと思われるが、もし「題」だけを書き集めたとするなら、中務は伊勢の河原院関係と思われる詠草を蔵していたが、いかなる状況で詠まれたものか判断としないので、安法に依頼して、それらの詠草に付すべき「題」を書き集めさせたという事情であったかも知れない。この場合の「題」とは、いわゆる題詠歌の歌題ではなく、すなわち「詞書」の意であって、『古今集』などで「題しらず」というときの「題」と同じく、その歌の詠まれた状況や場所を説明する短い文章を指すと考えてよいであろう。

したがって、私の考えでは、『安法法師集』の記事の解釈は、関根氏の御説とは若干異なって次のようになる。「伊勢という歌人の詠んだ歌とその詠作事情をあれこれ書き集めて（中務に）遣わした際に添えた歌——これらの歌が、私の住む河原院の遠近に伝えられたものです。これらに匹敵する秀歌をあなた（中務）にもぜひ詠んでいただきたいものです。あなたならきっと母上の残された詠草に劣らぬ秀歌をお詠みになれると思いますよ」。

安法法師と中務との直接的交渉を示す資料は管見に入らない。しかし、後藤氏も言われたごとく、安法法師が懇意にしていた清原元輔や源順らと中務は親しい間柄であったことが窺えるから、安法と

中務とも歌人仲間としての交渉は十分考えられるのである。

安法は村上朝の応和・康保年間には河原院に住んでおり、歌合などを催しているらしいから、中務が村上天皇から『伊勢集』の献上を命じられたことと、安法法師の詠歌との関連を考えても、時期的に特に問題は生じないことを付言しておきたい。

四、巻頭歌物語非独立説の意味するもの

ここで、第一節で述べた、『平中物語』第二段の話に触発されて『伊勢集』巻頭歌物語が執筆されたのではないかと考え方と、第二節で述べたところの、村上天皇の伊勢家集献上の命によって中務が『伊勢集』を編んだ、それが現存諸本の共通祖本であるという考えとのつながりについて明確にしておかなければならない。

先にも少し触れたが、関根慶子氏は、現存『伊勢集』の巻頭歌物語の部分と後統歌集の部分とは一体のものであって同一編者の手になるものであると考えられ、巻頭歌物語の非独立説を主張された。この点に関しても、後藤利雄氏は、巻頭歌物語独立説の立場から強く反論を展開されたが、やはり関根説の方が基本的に説得力を持つように思われるので、ここでも関根説に従うことにする。

氏は、「現存伊勢集の冒頭歌物語の結尾も、後統家集との境界線も、まことに不完全なあいまいな様相を呈していると言わなければならない」こと、また、「若し独立した物語であったものが、家集と合本になったものだとするれば、この物語的部分と、あとの家集的部分とに、必ずや何首かの重複歌があるべき筈であると思われる。

ところが（中略）家集的部分との間に「一首の重複をしか見ない」ことから、「それは、伊勢集の編者が、入手資料の中から振り

分けて、冒頭歌物語が成ったからに外ならぬであろう」と説かれた。そして、結論として、「伊勢集の歌物語は巻頭から、中宮崩御のあたりまでを進めて来たが、そのあとを続けようとして、或はその辺で製作意図を放棄して、未完成のままに、33のような帰属不明なもの（筆者注、「しのひてしりたりける人をやう／＼いひのしりければ」云々の詞書を有する「たきつせと」の歌）を持ち来ったまま、家集的部分を従属せしめる結果となったのではないかと述べられた。まことに聞くべき見解だと思われる。

さて、それではどうして編者はわずか三〇首ほどで歌物語の「製作意図を放棄」して、家集的部分へと方針を変更してしまったのであろうか。その辺の事情について、想像を逞しくしてみたい。

中務は、ある時、新作の歌物語『平中物語』を目にする機会を得た。『古今集』の有名歌人平貞文を主人公とする物語だというので興味津々で讀いた。そして、開巻まもなく、明らかに我が母伊勢との恋愛譚と認められる話を發見した。そこには、稀代の色好み平中をじらし翻弄する恋の手練としての伊勢の姿が描かれていた。これは中務にとって、まさに他人事ではない物語なのであった。

読了後、中務は思った。これは自らの手でぜひこの物語に対抗する物語を作らねばならない。母親伊勢が、あのような平中とのどうして名譽とは思えぬ恋愛事件だけで物語のヒロインとして世に行なわれるのは面白くない。それに、聞けば『平中物語』の作者は貞文の夷子だ（注27）という。こうなってはなんとしても伊勢の夷子たる自分が、母伊勢を主人公とした一代記風歌物語を作る必要があると思つたのである。

そこで、中務は、家に伝わる伊勢の詠歌資料を集め、歌物語の素

材となり得る断片の整理を始めた。そして、すでに世に聞えた枇杷左大臣藤原仲平との恋愛事件を皮切りに、宇多上皇の寵愛を得て皇子を産むに至る榮達の前半生を歌物語として綴る作業にまず取りかかったのである。スタイルは『平中物語』をまねたが、こちらは単なる和歌説話の羅列ではなく、時間の経過に従って、和歌的逸話を展開するという形で、一代記的性格をより鮮明にした。

中務はそこに、『平中物語』に描かれた「みつ」問答も取り込むことを忘れなかった。伊勢の人生において、平中との関係は単なる一挿話にすぎず、貴顕・皇族との恋愛が続く物語中においては、ほとんど無視されたに等しい存在でしかなかったことを明確にした。『平中物語』とは対照的に、平中に対してはあくまで毅然とした態度を取る伊勢の姿を描いたのは、もとより中務の意図したところであつた。

物語は、皇子の誕生、そしてその夭逝と続き、宮廷女房として榮達の極みに達したかに思われたヒロインに、一転悲劇が訪れたことを記す。さらには主君たる温子中宮の崩御となる。ここまでで波乱に富んだ伊勢の宮仕え生活における主要事件はほぼ語られた。

続いて、自らの父敦慶親王との出会いへと物語は進行する筈であつた。既にそのあたりの資料は準備され、物語の断片的な草稿もできていた。三三番歌の詞書（注28）いとみそかに人にあひたりけるに、やうやういひのしりけり（注29）云々の記事は敦慶親王との恋愛の発端を描いたものとなる筈であつた。ところが、中務は、ここで物語の執筆を中断してしまつたのである。

それは、村上天皇から伊勢の家集を献上するよう要請があり、急拠家集を編纂しなければならなくなつたからである。伊勢は『古今

集』に女流最高の入集歌数を誇る大歌人である。残した詠歌数は少なくない。家集の編纂はひと仕事である。遊戯的な色彩の濃い歌物の製作にのんびりとかかずらってはいられなくなったのである。

自家に残された伊勢の詠歌資料を整理するほか、伊勢ゆかりの人々にも資料の提供を求めた。そのひとり前節で述べた通り、安法師であったのである。

こうして中務は伊勢の家集を早急に編纂し、その巻頭に未完ながらも伊勢の前半生を物語的に描いた歌物語を据えた形で一卷を成さしめ、村上天皇に献上したのである。したがって、関根氏の言われるように、もともと巻頭歌物語的部分と後続家集的部分とは一体のものであって、編纂方針が歌物語の製作から家集の編集へと切換えられたことよってこのような形になったものである。物語的部分と家集部分との境界が今ひとつ判然とせず、家集部分の中に物語的部分の断片かと思われる記事が若干数存在するのも、この編纂方針の切り換えが相当に性急であったために、資料の取り込み方に吟味不足が生じたせいであろうと考えられる。

それにしても、何故中務はそれほどまでに家集の編纂・献上を急いだのであろうか。それは、ちょうど家集編纂作業継続中に夫の信明が陸奥守に任官し、中務も伴って下向することになったからではないかと思われる。まる四年も都を遠く離れることになっては、なんとでも家集の献上は下向以前に果たしておかなければならない。中務の身辺は急激にあわたしくなり、大急ぎで献上本をまとめたというのが実情だったのであるまいか。

以上、まったくの臆測を書き連ねたが、現存『伊勢集』の内部徴証

と他の周辺諸資料とを合わせ考えると、だいたいこのようなことが想定できると思うのである。

五、現存『伊勢集』祖本の成立年時

それでは、前節の想定に基づいて、中務撰になる『伊勢集』、すなわち現存諸本の共通祖本たる『伊勢集』の成立年時について考察してみよう。

まず、『平中物語』の成立時期であるが、これについては、早く萩谷朴氏が、末尾付載説話の解釈によって、富小路右大臣藤原顕忠の右大臣任官の天徳四年（九六〇）八月二日以後で、薨去した康保二年（九六五）四月二日以前と推定された。（注29）私は、萩谷説を受けて、さらに、『平中物語』は、貞文の息平時経が作り、一子保遠の元服に際して与えたものであるとする立場から、天徳四年（九六〇）三月の歌合以後で、保遠が元服したと思われる応和二年（九六二）頃までの一、二年の間に成立したと考えている。（注30）したがって『平中物語』は、早ければ天徳四年（九六〇）秋頃から翌応和元年（九六一）春頃には成立していたと考えてもよいのである。

中務は、天徳内裏歌合などを通じて『平中物語』の作者時経とは直接面識があったことは確実であるし、同じ『古今集』の著名歌人で因縁浅からぬ伊勢・平中の子として交際があったことは容易に想像できる。しかも、伊勢が物語中に登場しているのであるから、成立直後に『平中物語』を中務に見せた可能性は大きい。応和元年（九六一）春頃にはすでに中務は『平中物語』を読んでいたかも知れないのである。そして読了後すぐ、自らも母伊勢を主人公とした歌物語の製作を志し、やがて伊勢の残した詠草類を素材にして一代

記風歌物語を執筆し始めたと考えられる。

村上天皇から伊勢の家集を献ずるよう求められたのは、それからまもなくのことであったのだろう。これにより、中務は歌物語の製作を中止し、本格的な家集編纂の作業に取りかかることになった。

ところが、同年一〇月一三日に行われた小除目で(『日本紀略』)、源信明が陸奥守に任官する(『三十六人歌仙伝』)。これによって妻である中務の生活も急変することとなった。信明は天徳二年(九五八)正月に越後守になっており(『三十六人歌仙伝』)、その任が果てて後、引き続きいての地方官任官であった。中務は越後へは従わなかったのだが、当時としてはすでに老境に達した(この年五十二歳)夫の連続しての遙か遠国への赴任であり、今回は自分も同行する決意をしたのである。『玉葉集』巻八・旅歌(一一七〇)に、

源信明朝臣陸奥守にてまかりけるにともなひて
のぼり侍るとて相坂の関にて読み侍りける 中 務

宮こ人まつらんものをあふさかのせきままできぬと告げややらま
(注32)
とある。同内容の記事は『大鏡』「昔物語」にも見え、中務の陸奥
国下向は信じてよいであろう。(注33)

下向を決心した中務は、とても落ち着いて家集の編纂作業などに従事してはいられなくなり、歌の配列や詞書の記述などに関して十分吟味を加える余裕もなく、急いで家集の体裁を整え、天皇に献上したのであろう。献上はおそらく一〇月下旬頃のことであったと思われる。献上した家集の奥に書きつけたのが「しぐれつつふりにしやどの」の歌である。この歌、『拾遺集』では雑秋の部に入集しているが、「しぐれ」は秋歌と冬歌の両方に詠まれ、「神な月時雨にぬ

るもみぢばはただわび人のたもとなりけり」(『古今集』八四〇・躬恒)のごとく、「神な月」が「時雨」を導く枕詞のように用いられた例が多く見られるほどであるから、初冬一〇月のうちに献上したのであればふさわしい歌と言える。(注33)

国司の赴任は任官後数ヶ月を経てから行なわれるのが珍しくなかったようであるが、信明の場合は何しろ陸奥国であるから、嚴寒の冬場を控えて、初冬のうちに早急に赴任したのであるかも知れない。そうであれば中務はますます家集の献上を急がねばならなかったことになる。(注34)

こうしてまとめられたのが現存本の祖本となった『伊勢集』なのであって、その成立は応和元年(九六一)一〇月下旬頃と考えられるのである。巻頭に伊勢の一代記風歌物語が置かれ、それがわずか三〇首ほどで曖昧な結末のまま家集部分に移行し、その家集部分は雑纂的で、中に物語化の認められる詞書を有する歌がまま見られるなど、いささか雑然とした印象を免れない形になっているのは、かような成立事情によるのであろうと思われるのである。

おわりに

従来、一〇世紀中後期の成立かと漠然と考えられてきた『伊勢集』の巻頭歌物語を含む原初形態の成立を、大胆にも、応和元年(九六一)一〇月下旬頃とまで絞り込んでみた。客観的資料は極めて乏しく、確実な証拠を求められれば何ひとつ言えないに等しい状況であるが、内部検証と周辺資料の解釈によって想像を逞しくすればこのような推測も可能ではないかと、冒険は承知であえて報告してみた次第である。現存諸資料の新解釈以外には、平安朝、とりわ

け前期の諸作品の成立論や作者論はもはや不可能であろうと思うからである。大方の御批正をお願いする。

(昭和六一年五月稿)

〔注〕

- 1、関根慶子氏「伊勢集の三系統をめぐる考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第六卷(昭三〇・三)、のち『中古私家集の研究』伊勢・経信・後類の集(昭四二 風間書房)所収。島田良二氏「伊勢集 本文と研究」『私家集研究』第二輯(昭三〇・一二)、のち『平安前期私家集の研究』(昭四三 桜楓社)で再説。

- 2、注1掲出論文。

- 3、同右。

- 4、『伊勢集』の引用は歌仙家集系統本による。『私家集大成』(昭四八 明治書院)に「伊勢Ⅲ」として翻刻された本文に基づき、濁点・引用符を施すなど、私に表記を一部改めた。歌番号も同書による。以下同じ。『平中物語』の引用は萩谷朴氏校訂・角川文庫『平中物語』(昭三五 角川書店)による。表記は一部改めている。なお、『伊勢集』三系統の本文の問題に関しては別稿を用意するつもりである。

- 5、注4掲出角川文庫本一八頁脚注。

- 6、中田武司氏「平中物語論」『王朝歌物語の研究と新資料』(昭四六 桜楓社)所収など。

- 7、「伊勢集の冒頭歌物語と後続歌集との成立関係——家集から歌物語へ——」『文学・語学』第一三号(昭三四・九)、のち注1掲出書所収。

- 8、同右。

- 9、同右。なお、このことについては改めて後述する。

- 10、片桐洋一氏は、『伊勢集』のこの記事が「又、おなじ女」で始まっていることに注目され、これが『平中物語』の各段冒頭に類出する「又、このおなじ男」の類の表現と酷似していることから、「『平中物語』を意識してこの『伊勢集』が作られているのではないか」と言われた(『亦に生き歌に生』伊勢 日本作家7 昭六〇 新典社)。重要な指摘であろう。さらに加えて言えば、『伊勢集』のこの記事末尾の「返もせず」という表現は、『平中物語』第一七段の末尾「そのままのものはいはず」や同じく第二八段の末尾「返りごとみせず」などの表現に類似するし、また、『伊勢集』第一六番歌の次にある「とばかりいひて、やみにける」という表現は、『平中物語』の段末に頻出する表現に一致するのである。これらも『伊勢集』編者が『平中物語』を意識して叙述していることの頭れだと思われる。

- 11、「後撰集と伊勢集との関係——伊勢集の成立期を探る視点から——」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第一四卷(昭三六・三)、のち注1掲出書所収。

- 12、「古今和歌六帖研究——伊勢集との関係をめぐって——」東京女子大学『日本文学』第二三三号(昭三九・一一)。

- 13、平井卓郎氏『古今和歌六帖の研究』(昭三九 明治書院)。

- 14、引用は『新編国歌大観』第一卷(昭五八 角川書店)による。

- 15、注11掲出論文。

- 16、同右。

- 17、歌仙家集『忠見集』に見える「うちの仰せ事にて父忠岑が歌奉

れと召あるに書き集めて奉る」(『統国歌大観』二〇七一—四一五)という詞書を付した二首の歌も、ほぼ同様の事情で家集献上を行なった際の歌と考えられよう。

18、注11掲出論文。

19、「伊勢集」物語的部分の性格」『中古文学』第一九号(昭五二・五)。なお、注10掲出書にも同様のことが述べられている。

20、引用は『私家集大成^中』(昭四八 明治書院)による。「伊勢といふ人の」の異文は『統国歌大観』本による。

21、「伊勢集巻頭の歌物語の作者について——伊勢物語の書名に關聯して——」『文学・語学』第一四号(昭三四・一二)。

22、「伊勢集巻頭の安法法師作者説に対する疑問」『文学・語学』第一六号(昭三五・六)、のち注1掲出書所収。

23、注21掲出論文。

24、応和二年九月五日庚申河原院歌合は安法法師がその歌友たちと集って催した歌合であろうと推定されている(萩谷朴氏『平安朝歌合大成』二(昭三三 私家版、昭五四 同朋舎)。

25、注7掲出論文。

26、「伊勢集巻頭の非独立性について」『文学・語学』第二〇号(昭三六・六)。

27、萩谷朴氏は、『平中物語』の作者に、貞文の実子時経を擬しておられる(『平中全講』八昭三四 私家版、昭五三 同朋舎)。

なお、後述注30拙稿参照。

28、歌仙家集系統本(『私家集大成^中』)の「伊勢Ⅲ」による。先に注記中に引用したのは同じ箇所(西本願寺本(同「伊勢Ⅰ」)の本文。

29、注27掲出書。ただし、氏は、顕忠の右大臣任官を天徳三年(九五九)とされるが、これは同四年(九六〇)の誤りであると思われる(『公卿補任』、但し『尊卑分脈』は三年としている)。

30、拙稿「平時経とその子保遠——『平中物語』の成立と作者に関する一試案——」『国文学攷』第八九号(昭五六・三)。

31、引用は『新編国歌大観』第一巻(昭五八 角川書店)による。

32、家集によると、中務と信明は、同年二月一七日に行なわれた昌子内親王の裳着に際し、揃って屏風歌を詠進しているが、これは陸奥下向前に予め提出していたものと見たい。また、翌応和二年八月二〇日に行なわれた内裏歌合の負態に中務は一首歌を詠出している(『平安朝歌合大成』二一六〇)が、これは必ずしも都

にいなくとも提出が可能であったと考えられる。

33、現に『拾遺集』雑秋の部では、この贈答の直前に並ぶ三首の歌(一一三八—一一四〇)はいずれも冬一〇月の「しぐれ」を詠んだ歌である。

34、信明が陸奥守に任官してからわずか半月のうちに家集をまとめたとするのはいささか無理があるのではないかと思われるかも知れないが、一〇月の小除目での任官であってみれば、事前に運動をするなり感触を得るなりがあった筈で、中務もしばらく前からそれを予測した上で作業を急いでいたと考えることができよう。

〔付記〕本稿の概要を、昭和六一年度広島大学国語国文学会春季研究集会(昭和六一年六月二二日)にて口頭発表した。当日、御意見・御指導を賜った先生方に厚く御礼申し上げます。

—— 広島大学文学部助手 ——